

医大ニュース

2000.1 No.67



ステージ：盛りだくさんのメインイベントを開催



医療展：臓器標本、解説に興味深げな来場者



模擬店：クラブごとに自慢料理を披露

トリアス祭'99 (本紙8ページに関連記事)

目次

表紙	1
知事年頭あいさつ	2
学長年頭あいさつ	3
教授就任あいさつ	
心臓血管外科学教室	4
特集	
看護という仕事	5
「看護」と「介護」のこれから	6,7

学内ニュース	
短期大学の単位互換授業	8
トリアス祭	8
第4回短期大学部公開講座	9
第10回公開講座を振り返って	10
府民医学講演会報告	10
中国陝西省から医学研究生が来日	11
医大1999年を振り返って	12
内科診療ディビジョン制がスタート	12

新たな千とせ目（ミレニアム）を迎えて



京都府知事

荒 巻 禎 一

府民の皆さま、新年あけましておめでとうございます。

今世紀も本年1年を残すのみとなりましたが、まさに我が国は少子・高齢化や経済のグローバル化などの進展により、社会経済システムの広範な分野で大転換期の真っただ中にあるといえます。今年4月からは地方分権が本格的に進展するほか、介護保険制度も新たにスタートしようとしています。

長引く不況は、回復の兆しが見えたといわれているものの、地域の産業・経済・社会に大きな影を落としています。京都府としては、伝統産業をはじめ中小企業の皆さんへの積極的な支援など、引き続き懸命に不況・雇用対策を展開し、1日も早く明るい21世紀への展望をともに築いてまいりたいと思います。

また、京都府の財政も不況の影響により、「非常事態」ともいふべき厳しい状況を呈しています。この苦境からの脱出に向け、私としては、府民の皆さまに十分に状況を説明し、ご理解を得ながら財政の健全化に向けて全力をあげて取り組んでまいっている覚悟です。

さて、今年は20世紀を締めくくる年であると同時に、新たなミレニアム（2000年代）の始まりでもあります。京都府にとりましても、今年は21世紀の京都府の姿を示す、新しい総合計画「21世紀・地球時代の京都ビジョン」を取りまとめる年でもあります。

総仕上げの時期を迎えた第4次京都府総合開発計画では、京都縦貫自動車道などの道路網や昨年電化・高速化の実現を見たJR舞鶴線などの鉄道網下水道等の社会基盤の整備をはじめ、関西文化学術研究都市建設などのプロジェクトの推進、保険・福祉、教育、農林水産業の振興やベンチャー企業の育成などの産業振興に努め、ゆとりと活力にあふれた安心・安全な京都府づくりを目指してまいりました。また、この間の社会情勢の変化に伴う新たな課題にも積極的に対応し、とりわけ地球環境問題については、環境先進地・京都としての高い評価を得てきたところであります。本年10月には「第20回全国豊かな海づくり大会」が網野町で開催されますが、水産業の振興とともに海と海を取り巻く山や里の環境保全を全国に訴えることとしております。

新しい世紀は知恵の時代ともいわれております。明るく前向きに知恵を出し合って果敢に挑戦すれば、現下の厳しい状況も克服できるものと確信しております。「やさしくてたくましい地球時代の京都府づくり」に向け、府民の皆さまとともに希望を持って新世紀の扉をひらくことができるよう邁進してまいりたいと思います。

新年にあたり、皆さまの変わらぬご支援をお願いいたしますとともに、ご健勝、ご多幸を心からお祈りいたします。

2000年の記念すべき新春を迎えて



京都府立医科大学学長

栗山 欣 弥

本学構成員の皆様、明けましておめでとうございます。皆様と共に20世紀の最後の年を迎えることができ、何よりと大変うれしく存じます。

コンピューターの2000年問題に振り回された感のあった昨年末でありましたが、同時に深刻な経済不況、JCO 東海事業所における臨界事故、度重なる諸外国における地震の被害など、多くの問題のあった1999年でした。新しい年2000年こそはトラブルの少ない、希望の持てる年となることを皆様と共に念じたいと存じます。

本学を取り巻く諸環境、特に京都府の著しい財政悪化や、医療制度の改革と介護保険制度の導入などに伴う医療機関の経営悪化は、本学の運営のみならず、将来の展望についても大きな問題を投げかけています。本学構成員に与えられた本年の最大の課題は、このような現実を直視して適切な対応を考え、実施する一方、本学の将来についての冷静で、希望のもてる展望を確立し、その実現に向けて着実な歩み続けることにあると考えます。

昨年は附属病院の外科及び内科における診療科のディビジョン化、すなわち、臓器別、専門別の診療科再編成を実施しました。また新たに設置した紹介状がない患者の初診を受け持つ部門である総合診療部もスタートしております。「患者本位の医療の推進、高度医療の提供と先端医療技術の導入、地域医療への対応」と三つの観点から見直し、再編成したものであり、これは結果的に専門医師の結集につながり、診療の活性化や医療の質の向上を促し、他の診療科への波及効果を含めて、本学の教育、研究の発展につながるものであると確信しております。創立128周年を迎えた本学の長い歴史と伝統を考えると、この様な内科や外科における大きな変革は、多くの痛みと問題点を惹起することはよく承知して

おりますが、時代の流れを先取りし、大学の更なる発展を期するためには、この変革をどうしても推進し、成功させねばならないと考えております。病棟の再編や内科や外科、更には基礎医学部門を含めた大講座制の確立など、リストラ時代に対応した大学の組織の再検討と効率化は、本学の将来にとって避けて通れない問題であるといえましょう。また一方で、大学組織の効率化への投資と、新しい医学・医療の発展に遅れないための投資の必要性を主張し、また追求していく姿勢が重要であります。このような陰と陽とのバランスを考えながら山積する諸問題に対処し、如何にスマートに、また着実に生き抜いていくのかが、本学の直面する緊急課題の中で最大のものであると信じます。本学構成員の皆様の理解と協力を得ながら、微力ではありますが全力を挙げてこれらの難関突破を計りたいと決意しておりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

愈々念願の基礎医学学舎や附属脳・血管系老化研究センターの施設も全面稼働の状態となり、最後に残された医学部学生の基礎医学実習室の建設のための第二期第二工区工事も、本年秋の完成を目指してスタート致しました。この工事の無事終了を祈念致しますと共に、更にこれらの建設が、残された、また我々が強く希望している福利厚生施設の建設や、精神科病棟、外来診療棟などの全面改築につながっていくことを念じております。

新しく迎えた記念すべき2000年が、経済不況とややもすると希望を失い、社会の閉塞感に悩まされつつある我が国の現状を一掃してくれる年となることを心から希望すると共に、本学構成員とご家族のすべてが健康で幸せに充ちた生活を送り得る年となることを念じて、私の新年のご挨拶と致します。

教授就任あいさつ

母校での新教室(心臓血管外科学)確立を目指して



心臓血管外科学教室教授

北村 信夫

私はこの度、京都府立医科大学に新しく開設された心臓血管外科学教室の教授を拝命し、平成12年1月1日付けで就任させて頂きました。

当教室の開設に際し、私が京都府立医科大学の卒業生でもあったことから、多数の先輩、後輩諸先生方から熱心なお誘いを受け続け、私にとって光栄の極みで、同時に大変な喜びでもありました。しかし、その時の私の立場、熊本大学医学部第一外科学講座の現役教授、それも就任後やっと3年半経ち、教室指導にも慣れはじめたばかりでもありましたので、なかなか決心がつかなかったのも事実です。そこへ、栗山学長先生はじめ、教授会の諸先生方の御厚情と御尽力によって、この私をお選び下さいました。

この間の経緯について、諸先生方の御尽力と、その結果を知った際、私の心は表現しきれぬ程の喜びを感じました。このような私に身に余る栄誉と喜びをお与え下さいました先生方に、この場を借りて深く御礼申し上げます。

私は昭和42年、当学を卒業後、附属病院にて1年間のインターン研修を終えて、京都を後にしました。学生時代より憧れていた心臓外科医を目指して、東京女子医科大学附属・日本心臓血圧研究所外科に医療練士として入局したのです。その当時、この教室は本部における心臓外科の創始者であった榊原任教授が主宰しておられ、日本全国から心臓外科医を志す医師達が集って来ていました。それに対し、外科治療を求める心臓病患者も、全国津々浦々から紹介されてきており、まさに日本における心臓外科のメッカと言える状態でありました。これらの事実は私にとって、大きな魅力であり、吸い込まれるように入局しました。

その後、12年間にわたり、期待した通りのトレーニングを受け得た後、昭和55年国立大阪病院の心臓血管外科に就職し、約17年間部長職を務めた後、平成8年、熊本大学医学部第一外科教授を拝命し、昨年末までの3年6ヶ月間務めました。東京女子医大に在籍中、関連施設を含め国内外の5つの施設を文

字通り転々とした後、この度、33年ぶりに母校に戻ってきたこととなります。

京都は私の生まれ故郷でもあり、学生時代の思い出も多き土地であります。しかし、まだ当分の間、久しぶりの京都の町を懐かしむ余裕もなく、毎日学内での右往左往が続きそうです。私は外科医とはいえ、専門は心臓血管外科だけで、しかも、残された任期も少ない、このような私を、この度、教授として呼び頂けたのは何を求めてであるのか？今、私なりに真剣に考え続けています。その第一は新しい心臓血管外科学教室を、臨床面、研究面において国内はもとより、国際的にも他に引けを取らない一流教室を目指して立ち上げること、同時に心臓血管外科学を通じて、医の倫理を高く掲げつつ、全人的医療人を一人でも多く育てることと考えています。

これらのことは、そう容易なことではありません。まして、私のような無能力外科医には荷が大きすぎて、いくら努力しても到底無理なことかも知れません。しかし、私には大きな救いが有ります。それは、本学における心臓血管外科の実績です。心臓血管外科は本学の第二外科学教室にて、橋本勇名誉教授が昭和42年頃からすでに立派な基礎を築かれ、続いて岡隆宏名誉教授がそれをさらに発展させつつ、現在に至り、すでに多くの心臓血管外科医が学内外で活躍しておられます。

この点、私にとっては非常に幸せです。すでに、この分野でのルールは敷かれているのです。あとに残された私の仕事はこのルールの上を走らせる列車の質を高め、より乗り心地をよくして、多くの乗客を安全に目的地まで運べるものにするのだと思い、私の残された外科医としての人生のすべてを母校のために賭けて頑張る所存です。

どうか、この目的達成のために皆様方の温かい御支援、絶え間なき御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げつつ、この度の教授就任挨拶とさせて頂きます。

看護という仕事



副看護部長 越智敬子

病院の夜景という美しい白黒写真に魅せられて、39年前に小豆島から京都にやってきました。その後、歳月が流れ、平成12年の新春、本当に美しくなった府立医科大学が鴨川の流れとともにあります。

看護学院を卒業して、中央手術部で勤務するようになり、好奇心旺盛の青春時代、東京での学会や看護協会の総会に出席して、「東京は進んでいる。しかし私は京都で頑張ろう」と決意しました。昭和45年、東京女子医大で、榊原教授の心臓の手術を見学させて頂いたおり、府立医大からこられている医師がいるからと紹介され、案内して頂いた先生が、今日の心臓血管外科の北村教授ではないかと、古い記憶を辿っています。

私の36年間の半分は、中央手術部で3度勤務し、あと半分は看護学院、外科・泌尿器科・耳鼻科・小児科・皮膚科・第三内科の病舎と、看護部を巡りました。

手術室時代は、「中央手術部の青春」の本にも書きましたが、麻酔科が誕生し、腎臓移植や心臓手術が始まった時期で、現在のような優れた機器もなく、金属針で血管確保をし、体位変換もした時代でした。若い私は、ただひたすら患者の側で脈にふれ、体を触れ、手術が無事終了するのを見守っていたのを思い出します。腰椎麻酔も多く、患者さんが不安なく過ごせるような配慮にも頑張っていました。この時代、看護婦ボ・トクル・が誕生し、私も2回国体に出場しましたが、その後、厚生会のクラブになり、院内のあらゆる職種の方々と仲良くなって、仕事上にも大変プラスになりました。また学内の多くの方々のご支援ご声援を得て、国体に7回出場できましたことも大切な思い出です。

昭和52年、泌尿器科の病舎で、回腸導管の術後、家族の方があれこれ工夫されておられるのを見て、術後の看護を成文化する作業を始めました。現在は看護の参考書も沢山ありますが、当時は乏しく、まだ十分なフォロ・はされていませんでした。現在の

短大も更に高学歴化し、紙屋克子氏の編み出されたような、指1本で体位変換ができる方法など、新しい看護技術が続々発表されるのではないかと期待しています。

私は40歳の時、衝撃的な研修に出会いました。『人間と看護を考える会』の「入院患者への食の援助」というテ・マの会で、病院食は不味いもの・入院生活は不自由なものと考えていた私を180度変えさせられたショックな学びでした。その後、12年間、毎月大阪に通い、関西・西日本地区の仲間と、ホスピス、子供の人権、生命工学、看護は人、看護管理等々、またある年は「快い排便の援助」をテ・マに1年間取り組み、トイレの構造まで探求しました。この自主学習会での学びを、第三内科のA8・D8号病舎で活かすことができ、患者さんの痛みに温電法（学会発表）や、白血病患者さんに早朝の室外での10分間を可としたり、安楽を皆で考えた時代が、私の看護婦生活の最も充実した時代であったかと思返します。当時は告知もされておらず、看護婦にも非常なストレスがありましたが、明るい笑顔で訪室する看護婦を、患者さんはとても喜ばれました。

ここ3年間、看護協会の上京地区理事の仕事を通じて、保健・医療・福祉の激動の様子を良く視ることができました。院内にいと、複雑化する一方の治療看護や、事務処理に忙殺されがちですが、今の世の中の動きに合わせて、やさしい看護と共に、地域と連携した生かされる看護指導も充分できる看護婦であってほしいと思います。また、患者さんを含めたチ・ムで話し合い、皆が解かり合えた、よい方向に医療看護が進められる事を願っています。

退職間近に再び手術部で、患者さんや若い看護婦・医師達とふれ合い、治療法の変化を目の当りにしていますが、介護保険がスタ・トし、看護がますます重要になってくる21世紀、後輩の方々がこの立派になった大学及び附属病院で、優れた看護や研究を展開されてゆかれることを楽しみにしています。

「看護」と「介護」のこれから

医療技術短期大学部 岡山寧子

介護保険制度の導入が目前に迫っている中で、看護職と介護職の役割分担が大きな課題となっています。思い起こせば、昭和62年社会福祉士及び介護福祉士法が制定された時、看護職にある私達にとって、この新しい専門職からある挑戦を受けた感がありました。というのは、両者はケアという意味において同じ領域の職種だからです。それから10年余りが経過し、今再び、看護と介護を考える時がやってきたようです。ここでは、看護職と介護職が共働しているかに質の高いケアを提供できるのかという視点に立って、「看護」と「介護」について考えたいと思います。

「ケア care」・・・その意味するもの

保健・医療・福祉の世界にいと、ケアという言葉をよく耳にします。セルフケア、ターミナルケア、プライマリケア、コミュニティケア、ソーシャルケア、ホームケア等々、実に幅広く使用されています。ケアという単語には「世話をする・面倒をみる・保護する・心配する」という意味があります。本来的にケアは、固有の学問領域によって確立された専門用語ではなく、ひろく対人援助にかかわる分野で用いている言葉で、人間の生き方や活動の本質を理解するのに役立つ概念であるともいわれています。M.メイヤロフは『ケアの本質』（みゆる出版）の中で、「・・・1人の人格をケアすることは、最も深い意味でその人が成長すること、自己実現を助けることである。・・・他の人々にケアを通して、他の人に役立つことによって、ケアする人は自分自身の生の真の意味を生きているのである」と哲学的にその意味を論じています。そして、歴史的な流れを経

てこのケアが専門的な職業として確立されてきました。それが看護であり、保育、教育、家政・生活経営、そして社会福祉での介護等です。

「看護」と「介護」

では、介護とは何か・・・介護とは、人が人生でなそうとしていることを実現するために、日常生活上の援助や社会参加、社会生活の維持・増進への援助をいいます。一言でいうと援助を必要としている人への生活面からの世話つまり生活ケアを意味し、それはその人自らの意志に基づき、自立した質の高い生活を送ることをめざしています。法的に介護という用語が登場したのは明治中期であり、以後、介護は恩給法や救護法等、加えて社会福祉サービスの活動内容や政策上の課題としても用いられ、老人福祉法により定着してきたといわれています。さらに、社会福祉士及び介護福祉士法が制定され、介護職は福祉分野での専門職として位置づけられました。この法律で「介護福祉士とは・・・身体上もしくは精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき入浴、排泄、食事その他の介護を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を業とする者をいう」としています。一方、看護について少し触れますと、看護とは健康のあらゆるレベルにおいて個人が健康的に正常な日常生活ができるよう援助すること・・・それは、看護婦（士）と対象との相互作用の過程であり、この過程で目指しているものは、対象の自助力へのはたらしかけである（日本看護協会）とし、保健婦助産婦看護婦法において「看護婦（士）とは・・・傷病者もしくははじよく婦に対する療養上の世話又は診療上の

補助をなすことを業とする者をいう」としています。

このように、ケアを業とする看護と介護は、対象の「自立」「健康」「生活」への働きかけであるという意味では違いはないように思います。歴史的にみても、この両者の源は同じであるとの指摘も多くみられます。例えば、一番ヶ瀬康子氏は「F. ナイチンゲールの著『救貧覚え書』で展開されているのは今日の介護そのものである」と指摘しています。『救貧覚え書』（現代社）では、対象が健康的に自立して生きるために、彼らの持てる力を活用し、それを発揮できる道を自身で創造していけるように働きかけることが援助であると示しています。このことは、ナイチンゲールが看護・介護を包括していたことがうかがえます。というよりは、彼女自身が看護・介護を分けるというような発想をもっていなかったのではないのでしょうか。しかし、時代の流れと共に、医療技術の進歩を実質的に支えるマンパワーとして、病院における看護婦（士）が主流となって看護は発展しました。その一方で、高齢社会が進展し、在宅や福祉施設で日常生活上の援助を行う専門職として介護職が確立していき、看護・介護は明らかに分化して、ケアの担い手として、保健医療分野では看護職が、福祉分野では介護職という現在の状況になっていきました。

分化から統合へと向かう「看護」と「介護」

このように看護と介護は保健医療と福祉のそれぞれの分野で活躍してきた訳ですが、高齢社会に至り、再びお互いが手を結ぶ歴史的状況が巡ってきました。現在、介護保険制度の導入によって統合が求められているからです。介護保険制度の目的は、加齢に伴って生じる疾病等により要介護状態となった者等が、その有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるよう、国民の共同連帯の理念に基づき必要な福祉サービス及び保健医療サービスに係る給付を行うことです。この制度では福祉と医療に分かれて

いた高齢者に関する介護サービスを再編成して、福祉サービスも保健医療サービスも同様の利用手続き、利用者負担で利用者の自由な選択により総合的・一体的に利用できる仕組みを構築することを目指します。この制度の創設背景の一つに、今まで、行政的に縦割りで、保健医療と福祉という2本立てで対応してきたことが、現場で矛盾をきたしている実態があるのです。例えば、疾患を有し、機能障害のために生活に支障のある多くの要介護高齢者の場合、対象の自立をめざして、疾患をコントロールしながら、日常生活への援助というように、保健医療と福祉の両面からの対応が同時進行する中で、疾患は医療、生活援助は福祉からとバラバラの対応では、高齢者にとって効果的な援助が実践できてはいえませんが、そこで、保健医療と福祉におけるケアの専門職がうまく連携をとり、より質の高いケアを提供していく必要があります。これがケアの統合化です。そして、この制度では本人のニーズに適応したサービスを効率的、かつ計画的に提供する観点から「介護サービス計画を作成してサービスを受給する」ことを給付の基本にしています。在宅では「居宅サービス計画」を、施設では「施設サービス計画」を作成し、それに基づいてサービスが提供されます。ここでいう介護サービスの中核は、いうまでもなく看護であり介護です。従って、この制度の導入によって、システムとして看護・介護の統合化が仕掛けられ、両者が中核となってサービスの提供を実践していくこととなります。今後、生活面からみた看護の必要性がより一層高まり、医療の場を福祉に近づける一方で、介護が重症度のより高い対象を担う力を蓄え、福祉の場に医療を取り込んで、両者はますます接近することが予想されますが、相互の専門性を十分理解し合い、円滑な連携を図りながら、高齢社会を支える担い手として新しい歴史を築いていきたいものです。

学内ニュース

看護の技術が体験できた
短期大学の単位互換授業

医療技術短期大学部における単位互換授業は今年初めての取り組みで、提供科目は「やさしい看護学 自立のための車椅子移動とまさかの時の救急処置法」であり、平成11年8月31日、9月1日の2日間の集中授業で実施しました。募集人員は、講義だけでなく実技も実施するため50名に設定しました。しかし、応募者は194名と私達の予想を遥かに超えるものであり、学生達にとっても看護・介護に対する興味が強く、現在の社会を反映していることが伺えました。授業内容は下記表の通りで、講義に続き同じ項目で実技を組み入れました。学生は講義・実技ともに非常に熱心で、学習意欲も旺盛で積極的に質問をしていました。終了後の感想では、「授業

内容が非常にわかりやすく、実技においても先生が疑問にすぐに答えてもらえる人数で理想的であった」「車椅子の実習では看護側だけでなく、看護される側からの立場も一緒に学べた」「今回の授業で習った車椅子移動や人工呼吸・心マッサージなどは実践できる自信がもてたのでこの経験を今後に生かしたい」「看護を通して人間の本質に迫れたような気がした」などすべての学生がこの2日間の単位互換授業は非常に有意義であったと評価していました。今後、学生の幅広い関心と興味に応じられるように私たちもより努力をしていかなければならないと考えています。

(文責：短期大学部 種池礼子)

プログラム

第1日(8月31日)

- 9:00~9:15 開講のあいさつ
オリエンテーション
- 9:20~10:20 講義 看護とは
- 10:30~12:00 講義 寝たきり予防と看護
- 12:00~13:00 休憩
- 13:00~16:10 実技 体位変換と車椅子移動

第2日(9月1日)

- 9:00~10:20 講義 バイタルサインと
簡単な救急処置法
- 10:30~12:00 講義 救命救急看護
- 12:00~13:00 休憩
- 13:00~15:40 実技 救急蘇生法
- 15:50~16:10 まとめ

トリアス祭 '99 JUMP UP [to 2000]

1999年のトリアス祭、ということで、今までとは一味も二味も違ったトリアス祭にすることを目標にがんばりました。

まず、医科大学の学園祭であることを意識し、キャンペーン「意志表示カードって何?」と題してシンポジウムを開催し、また、「ホスピスケアを考える。あなたは死をどう迎えるか?」と「死に近い場所」というテーマで、各々、南吉一先生、黒田清さんに講演して頂きました。これらは、医療関係者以外の人々も大変興味を持っているテーマであり、好評でした。

例年のように、医療展も行いました。今年は、癌、

骨密度、感染症がテーマで、臓器展示や骨密度測定など、みにきてくれた人に人体の不思議さを少しでも感じてもらえたと思います。

今年からの試みとして、ピアガーデンも行いました。もっと多くの先生方に、トリアス祭に参加してもらうためです。

今年のテーマはJUMP UP [to 2000] でしたが、そのテーマにふさわしく、来年以降に向けて大きな転換を果たせたと、トリアス祭を終えた今、皆一同満足しています。

(文責：4学年 竹本有希)

第4回短期大学部公開講座

「育ち合う子育て 家庭と地域をつなぐ子育て支援」と題して、シンポジウムと講演により、第4回短期大学部公開講座を7月24日（土）13時20分から16時10分まで図書館ホールにて開催しました。

シンポジウムでは「京都における子育て支援」と題して、本学教員2名が京都府内で行った子育てに関する調査の報告、学外から京都における公的な子育て支援サービスの現状、子育て中の母親による体験などを報告した後、参加者と共にディスカッションが活発に行われました。

講演は、学外から、小児保健分野で第一人者である講師により「子育て支援における医療・保健・福祉の連携」と題して、シンポジウムを踏まえた上で我が国における現状と子育て支援の方向性についてお話し頂きました。

参加者は府民、学生、助産婦、保育士、保健婦など265名であり、参加者の多くは子育て支援に関わ

る専門職者や現在子育て中の母親や一般の方々でした（図1）。

参加の動機は子育てにおいて何らかの問題意識を持つ方が多く見られ（図2）、公開講座を知った方法は府民だよりや新聞の他、友人・知人の紹介の割合も多く認められました（図4）。

終了後のアンケート結果では殆どどの参加者の方々から有意義との評価をいただき（図3）、今回は初めて、参加者のための保育室を学内に設置し25名の託児を行いました。これについても好評をいただきました。

なお、今回の公開講座を通して多くの子育て支援に関わる公的・私的な機関における方々と連携することができ、この連携の過程そのものが本テーマの「子育て支援における連携」に向けてのステップになるものと考えています。

（文責：短大部 宮中文子）

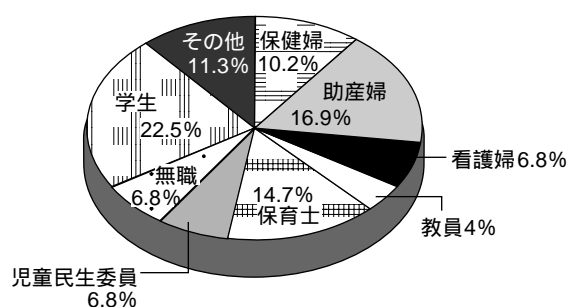


図1：受講者の職業

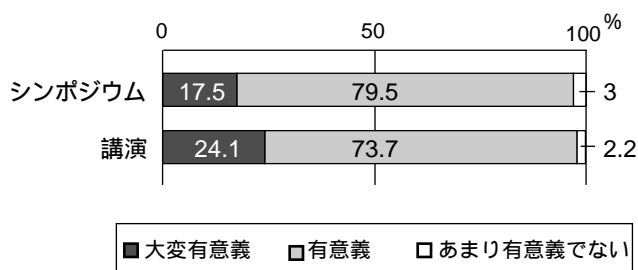


図3：終了後の感想

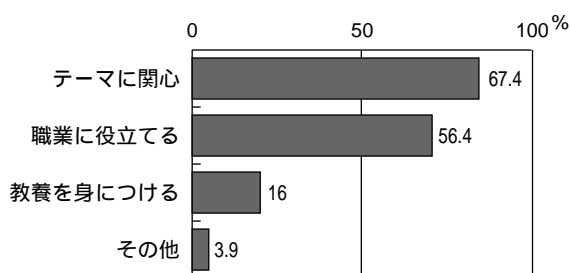


図2：公開講座への参加動機

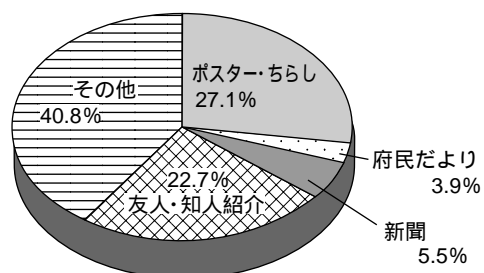


図4：公開講座を知った方法

第10回公開講座を振り返って

第10回公開講座が9月28日(火)、29日(水)、30日(木)の3日間、本学図書館ホールで開催されました。今回のテーマは「病気と上手につきあおう」。3日間で延べ636名が受講、うち3日間とも受講して修了証書を受け取られた方は176名にもなり、昨今の病気に対する一般府民の関心の高さを象徴して、大勢の熱心な府民の方の参加中、大盛況のうちに終わることができました。

第1日目は食事などの日常生活と密接に関係する生活習慣病について、第2日目は高齢化に伴う病気への対処法について、第3日目はがんの早期発見と治療法について講義を行いました。

アンケートを実施した結果、98.2%が有意義であった、85.9%がわかりやすかったという回答があり、今回初めて受講した参加者からは、「こんな良い講座があったのに今まで知らなかった。今後は必ず受講したい」という

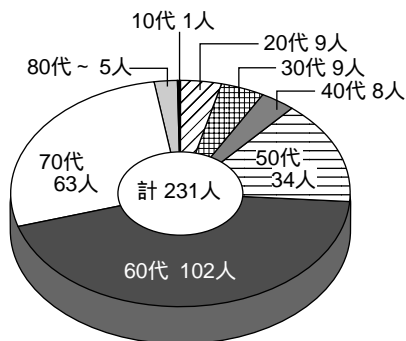
声寄せられました。

一方で、「講義の時間をもう少し長くって詳しく説明してほしい」「質問コーナーはもっと時間をとってほしい」等の意見があり、より掘り下げた内容、より具体的な内容を要望される声も聞かれ、今後検討すべき課題であると考えます。

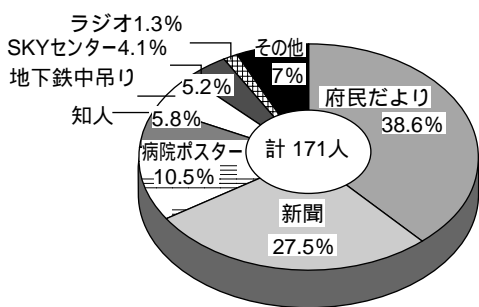
病気のことを聞くのはなんとなく怖くてイヤなものですし、病院へ積極的に行く人はいませんが、今回公開講座を受講された方がこれを機に病気についての知識を深められ、また、積極的に健康診断を受診されることによって健康を維持・増進されることを願っております。

最後に、この公開講座を開催するにあたりまして、お忙しい中、司会・講師を務めていただいた各先生方にご場を借りてお礼を申し上げます。

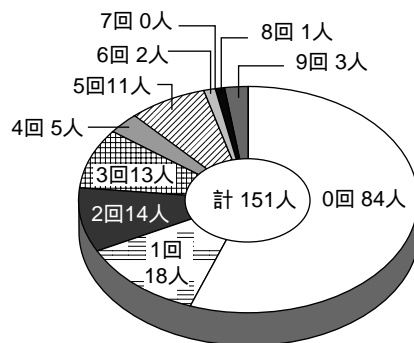
(座長 眼科学教室 教授 木下 茂)



年齢別受講者数 (受講申込みから集計)



公開講座を知ったきっかけ (第1日目参加者対象に調査 複数回答)



過去の参加回数 (第1日目参加者対象に調査)

老化を考える府民医学講演会

本学附属脳・血管系老化研究センターの研究成果を府民に還元することを目的に、毎年開催されていますが、今回は「どうする介護、どうなる保険」をテーマとして、11月26日(金)の午後1時30分から亀岡市で開催されました。

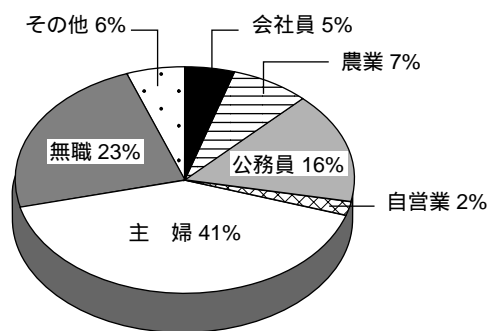
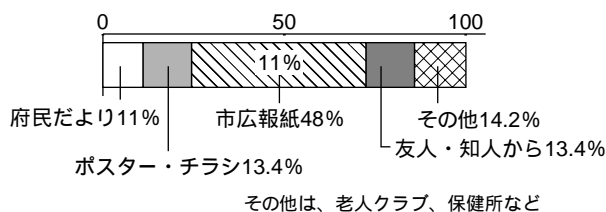
当日は、亀岡市をはじめとする周辺市町からの参加が



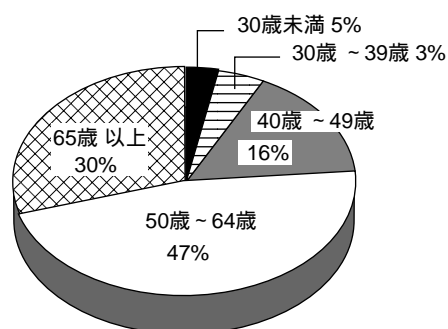
あり、今回の講演内容が「介護保険」ということで、会場のカレリアかめおかは、熱心な150名の参加者で大変盛況でした。

アンケートの結果、回答者全員が「大変有意義」または「有意義」との回答であり、高齢者の健康や老後の問題についての関心の高さが現れており、今後とも、開かれた大学として、附属脳・血管系老化研究センターの研究成果を積極的に府民に還元し、よりよい講演会となるよう努力していきたいと考えております。

府民医学講演会を何で知ったか？(複数回答)



職業



年齢

中国陝西省から医学研究生が来日

本学では、京都府と中国陝西省との友好交流事業の一環として、昭和60年から医学研究生を受け入れていますが、今年度も研究生1名が10月7日に来日しましたので紹介します。



氏名	呉 堯 平
本国での所属	第四軍医大附属西京医院骨科
本学の配置先	整形外科学教室
研究内容	高度な整形外科学的治療の習得

呉先生は、おもに手術等の見学による外科的治療の習得や文献等による研究に励んでおられます。

先生の趣味は囲碁を打つことであり、アマチュア3段の腕前です。休みの日には近くの囲碁クラブに通い、地元の人々と囲碁を通じて友好を深められています。本学で碁を打たれる方がいらっしゃれば、呉先生と一席いかがでしょうか。

また、先生は現在、日本語会話の習得にも力を注がれており、来日当時よりも格段に上達されています。先生を見かけられた際には、気軽に日本語で声を掛けてあげてください。どうかよろしく申し上げます。

医大1999年を振り返って (学事関連、 府、教職員関連の出来事)

< 1月 >

16 大学入試センター試験 (~ 17)

< 2月 >

5 短大専攻科入試
19 短大専攻科入試合格発表
25 大学入試 (前期日程試験) (~ 26)

< 3月 >

2 短大看護学科一般入試 (~ 3)
5 大学卒業式・大学院修了式
6 大学入試 (前期日程試験) 合格発表
12 大学入試 (後期日程試験)
12 短大卒業式
17 短大看護学科入試 (一般) 合格発表
20 医師国家試験 (~ 21)
20 大学入試 (後期日程試験) 合格発表
30 看護婦、保健婦、助産婦国家試験合格発表
26 介助犬の府立施設への同伴を承認

< 4月 >

6 大学入学式
7 大学院入学式・短大入学式
29 対東京慈恵会医科大学定期戦 (~ 5 / 3 ・東京)
1 心臓血管外科学教室設置
14 基礎医学学舎及び附属脳・血管系老化研究センター施設竣工式
22 教授停年退職記念式典

< 5月 >

15 解剖体春季追悼式

< 6月 >

11 本学外部評価委員会
22 京都府コンピュータ西暦2000年問題対策本部設置

< 7月 >

25 西日本医科大学学生総合体育大会 (~ 8 / 9、和歌山)

< 8月 >

3 医大スポーツ祭典 (~ 6, 11, 18)

< 9月 >

1 附属病院、外科診療科再編実施
11 第33回府庁スポーツ祭典 (太陽ヶ丘)
29 第10回京都府立医科大学公開講座 (~ 30)

< 10月 >

16 解剖体秋季追悼式
24 平成12年度研修医筆記試験
29 大学院入学試験
31 トリアス祭 (~ 11 / 3)

< 11月 >

1 本学創立記念日
26 平成12年度短大看護学科推薦入試
30 看護婦採用試験 (~ 12 / 3)
26 第16回老化を考える府民医学講演会 (亀岡市)

< 12月 >

6 附属病院、内科診療科再編実施

内科診療ディビジョン制がスタート...

12月6日内科の外来診療が、臓器別・疾患別のいわゆるディビジョン制としてスタートしました。さすがに開始後数日はあちらこちらでスタッフ、患者の皆さんの戸惑う姿が見受けられましたが、この1ヶ月を振り返って見れば、特に大きな混乱もなく順調なスタートができたのではないかと思います。これも前日まで準備作業に追われていた関係スタッフ全員の努力の成果だと感謝しています。内科が新しい診療科として生まれ変わることで、メリットもあれば複数の疾病を抱える患者の対応にデメリットが生じる危険もあります。「患者本位の医療」をするために何が一番大切かを常に考え、ゆっくりと、しかし確実に歩みを進めて行きましょう！

(内科主任診療部長 近藤元治)



平成12年 1月号

編集・発行

京都府立医科大学

(庶務課庶務係 電話075-251-5210)